
魔法少女リリカルなのは SCARLET MINDS

オオオカカズマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは SCARLET MINDS

【Nコード】

N7375N

【作者名】

オオオカカズマ

【あらすじ】

あの日、あの時、俺のせいで世界が一つ滅んでしまった。二度とあんなことが起きないようにする、これが死んでいった人々へのせめてもの償いだ。

自己満足、だと？

そんなこと、俺が一番わかっている…。

序文（前書き）

これは「魔法少女リリカルなのは」の二次創作小説です。
設定が崩壊する可能性が非常に高く、またキャラ崩壊が発生するこ
とも十分にあり得ます。

そういうのが苦手な方は読まない方がいいと思います。

序文

遙か昔、広大な次元世界は戦場そのものであった。

終わりのない殺し合い、それが当時の日常であった。

それから数百年がたち、戦乱は終結した。

そして、二度とこのような戦争が起きないように、次元世界が平和であり続けるようにとの願いを込めて、時空管理局がつくられた。

今の時空管理局が設立されてから、はや79年がたつ。

設立当初は次元世界を揺るがすような凶悪事件が数多く起こったが、かの三提督の活躍により管理局は次元世界を束ねるほどの強大な組織になり、犯罪件数は激減し、人々が恐怖に怯えることもなくなつた。

世界は今、平和の中にある。

人々はこれからも平和な世界を望みつづけるだろう。

だが、人が人としてあり続ける限り、平和など実現しうるはずがない…。

序文（後書き）

初めての小説ですが、よろしく願います。

第一話

この世界には色が2つしかない。

一色は、雲ひとつない澄んだ空の青。

もう一色は、地表を完全に覆い隠す砂の色。

ここは、とある無人世界。

この世界は辺り一面に砂漠が広がっており、竜や蠍などを除くと、ほとんど生物はいない。

地平線の彼方まで続く砂漠。

人などいるはずがないのに、そこには二人の男女が佇んでいる。

一人はオレンジの髪をした少年。

白いバリアジャケットを着ており、腰には日本刀のようなものを差している。

本来バリアジャケットは相手からの攻撃によるダメージを軽減するため、できるだけ体を露出しないようにしなければならないのだが、この少年の腕部はバリアジャケットに覆われていない。

そこから見える腕は太いわけではない。だが、相当鍛えられている、ということが見ただけでわかるほど引き締まっている。

もう一人は黒髪の少女。

こちらは黒を基調としたバリアジャケットを身に付けいる。体のラインは細くしなやかで、にも関わらずどこか強さを秘めている。

る感じがする。

ただ、胸だけは少し残念なものであった。

二人ともバイザーを付けているため、素顔を見ることが出来ない。だが、バイザーを装着していて目を直接見ることが出来なくても、彼等が鋭い目をしているということがわかるほどの張り詰めた空気が漂っている。

しばらくの沈黙の後、少年が語りだす。

「俺達がこっちに飛ばされてからもう一年か……。相変わらず人間は馬鹿なことをやめようとしな。なんで過去の過ちを繰り返そうとするんだ……。」

少女は口を開いた。

「過ちのない人のことを人とは言いません。それは貴方もよくわかってるでしょう？」

少年は小さくため息をつく。

「…そうだな。だからこそ、俺達が何としても食い止めなければなら。ない。」

少年は無意識に拳を硬く握りしめていた。

「時間です。」

少女の声が静寂を断ち切った。

すると、彼等の足元に魔方陣が輝き始め、そこから生じた光が彼等を包み込み、光の渦がほんの一瞬の眩い閃光を放ったかと思うと、光と共に、そこにいた二人は消え失せていた。

そこには彼等の足跡の他に何も残っていなかった。

第一話（後書き）

本編突入なのに本編という感じがまったくしないのはなぜだろう？

文字数が少ないのは仕様です。

ほ、本当だぞ。

がんばれば、もっと長い文章だって書けるんだ。

第二話

フェイト・テストロッサ・ハラOWN執務官

わずか9歳のときに闇の書事件の捜査に囑託魔導師として参加。

19歳のときに機動六課ライトニング隊隊長に就任。

機動六課は、かのジェイル・スカルエッティー事件を解決したことで知られている。

現在はどこかの分隊に所属しているわけではなく、本局勤めをしている。

いつもは優しそうな雰囲気のある彼女は今、すこしばかり浮かない顔をしてモニタを見つめている。

そのモニタに映っているのはお揃いのバイザーをつけている少年と少女の二人組だ。

正確にいうと、二人ではない。

大勢の人間が映っている。

だが、その二人組以外に誰も立っている者はいない。

全員、これといった外傷は見当たらないようだが意識を失って倒れている。

モニタに別の画像が映し出された。

先ほどの少年が数人の男たちに取り囲まれている。

少年は剣と銃をもち、周りの者は各々のデバイスを少年に向かって構えている。

そんな危機的状况にも関わらず、少年は笑いを浮かべている。

そう、少年の周りにいるこの男たちは先ほどモニタに映っていた、意識を失って倒れている男たちに他ならない。

フェイトの目線が少年の足下にたどり着いたとき、彼女の目はほんの一瞬だけ殺気を帯びた。

「これって…。」

フェイトが呟くと、隣にいる女性が反応する。

「はい。この魔方陣、ミッド式でもベルカ式でもありません。」

そう答えた女性の名はシャリオ・フィニーノ。

皆からはシャリーと呼ばれる。

彼女は今、フェイト・テストロッサ・ハラウン執務官の補佐をしており、補佐官の仕事の傍らデバイスの調整なども行っているが、こちらが本業なのではというほどの腕前らしい。

「まあ、それも気になるけど…。」

「はい…。推定魔力値がAAAクラスとはいえ、あのファミリートをたった二人で殲滅するなんて…。」

今度は少年と男たちとの戦闘の動画がモニタに流されている。

少年は敵から繰り出される無数の銃弾を軽々しく避け、降り下ろさ

れる剣を刀ではじき、敵のスピアの矛先をシールドでいなし、隙を見つけ次第、左手の刀を振るい相手をなぎ倒し、右手の銃で弾丸を放つ。

目にも止まらぬ早さで次々と男たちが倒されていく。少年の動作ひとつひとつには無駄がなく、まるで舞い踊っているかのようだ。

そしていつの間にか、男たちは全滅していた。

ここでシャーリーが口を開いた。

「ところで、これから彼らの扱いはどうなるのでしょうか？悪く言えば暴力事件ということになるんでしょうが、管理局側に直接的な被害はなかったですし、敵対行動もとってませんよね。」

「うん。たぶん何かの事情があって、こんなことをしたんだと思う。彼等にその気があれば管理局に入れることもできるだろうね。」

フェイトの表情に普段のおおらかさが少し戻ってきた。

「管理局は即戦力になるような精鋭魔導師の人数がまだまだ少ないですしね。それに、彼等が入ってきたらあのデバイスを調べさせて貰えるかな？見たことない機能が多そうだし、もしかして自分達だけで作ったのかな？一度でいいから見てみたいな、触りたいな、出来れば分解させてもらえないかな…。」

メカオタ魂に火がついてしまったのだろうか、シャーリーが異常なほどに目を輝かせている。

「そうなるといいね…。」

シャーリーの勢いにおされたフェイトは苦笑しながらそう答えた。

「じゃあ、今回の事件についての資料集め、よろしくね。」

「わかりました。とりあえず無限書庫に行ってきますね。」

「そうだね。ありがとうシャーリー。こっちからユーノに連絡しておくよ。」

シャーリーが退室してからもフェイトはしばらくモニタを見つめていたが、疲れがたまっていたのだろう、彼女自身も気づかぬうちに深い眠りに就いていた。

第二話（後書き）

第二話の時点でこんなに投稿するペースが遅いなんて…。
本当に先が思いやられる…。

第三話

「なんでここの隔壁が閉じているんだ？」

ようやく組織の人間が異変に気が付いた。

誤作動でもしたのか、誰かが間違ってボタンを押したんだろう。そう呟きながら男は管制室に向かって歩き出す。

だいたい、この基地の存在が管理局にばれるわけない。

誰もこんな無人世界のこんな辺鄙^{へんび}なところに来るはずもないし。

管制室にたどり着いて中の様子を見た瞬間、男は目を疑った。
4人の仲間が倒れている。

そしてその横で見知らぬ少年が平然とコンソールを叩いている。

「誰だ、貴様！」

男は即座に腰から剣を引き抜いて構える。

「今、手が空いてないんです。後にしてくれますか？」

少年は男の方を振り向きもせずモニタを見つめながらそう答える。
その態度が男の癪にさわった。

「てめえ、ふざけやがって!!」

男は即座に間合いを詰め、少年に剣を降り下ろす。

剣は少年に届かなかった。

本当ならば届いていた。

だが、剣先は床に落ちていた。

剣が少年を切り裂こうとしたまさにそのとき、少年の手刀がその剣を切断していた。

俺の剣が折られた、だと？

しかも武器を使わず素手で！？

こいつ、何者だ？

男の血の気が引いていく。

目の前の光景に動揺する。

恐怖で体が震え出す。

逃げなければ！

このまま立ち尽くしていたら確実にやられる！！

男は我にかえり、間合いを空けようとした。

だが、少年はすでに男の懐に入り込んでいた。

そして、男がそのことを認識した直後、少年の拳が男の鳩尾に炸裂し、男は意識を失い床に倒れ込んだ。

「まったく。主のピンチになにやってんだ。」

少年が呟くと、管制室の奥の部屋から声が返ってきた。

「こっちも宝探しで忙しいの。それに、何がピンチよ。片腕しか使ってなかったじゃない。」

「まあな…って、見てたのかよ!」

少年は声がした部屋を覗き込む。

そこには、数人の男が倒れている。
そして彼らの所持品を物色している、少年のものと同じバイザーを付けている少女がいた。

「それはそうと、そんな下っ端が金になるようなものを持つてるわけないだろ。一人ひとりにそんなことしてたら日が暮れるぞ。」

「知ってる? この時期、この近辺は日が沈まないんだよ。」

「ああ、そうだな。…俺が教えるまでは知らなかったくせに…。」

少年は無意識に溜め息をついた。

それを見て見ぬふりしながら少女は話を続ける。

「それにこんな下っ端でも宝を持ってる奴はちゃんといろの。」

少女はそう言って男のズボンのポケットから青い宝石を取り出し、少年に見せつけた。

「ほう、こりゃまた上等なサファイアだな。…って、これじゃあただの強盗じゃないか！」

「仕方ないじゃない。生活費は自分たちで稼がないといけないし、だいたい、デバイスの材料とか整備用品とかで一番お金を使ってるのはどちら様？」

「…すみません。」

自分のことを主であると言っていたのに、少年は目の前の少女に頭が上がらないようだ。

「まあいいわ。で、ここのデータは全部取れたの？」

「ああ、問題ない。あとはボスを取っ捕まえてアレの在り処を吐かせてからここをぶっ壊す。宝探しはそのあとだ。幹部クラスのやつなら、もつといいデバイスを持ってるかもしれないし。」

「その後の処理は管理局にまかなげ、ですよね。」

「人聞きの悪いことを言うな。…まあ事実には違いないが。」

少年はまた溜め息をついた。

「それではボスをボコりに行きましょうか。」

そう言って、彼らは管制室を後にした。

丁度そのころ、この無人世界に新たな来訪者が現れた。

第四話

プラセオファミリー

質量兵器、ロストログアの裏取引の中枢を担う広域次元犯罪集団。裏社会に通じている人間でプラセオを知らない者はいない、というほど大きな組織である。

数年前、とあるロストログアの取引にこのファミリーが関わっているという情報を入手した時空管理局は、魔導師15名を取引現場に送り込み、犯人の一斉逮捕を試みた。しかし、組織との戦闘で魔導師8名が負傷し、結局、組織の人間を一人も逮捕することができなかった。

フェイトは現在極秘で進められているプラセオファミリー制圧作戦の準備のために、一人で彼等の基地がある無人世界を訪れていた。

主な任務はファミリーのアジトの詳しいデータの入手と、ファミリーの動向を調査するためのサーチャーの設置だ。

今、フェイトがいる無人世界はつい最近になって発見されたので、名前がまだ付けられていない。

この無人世界、実は、ロストログアの取引を終えたプラセオの構成員の1人がアジトに帰るのを追跡していた時に発見されたものなの

である。

もし、プラセオという組織がなかったとしたら、この無人世界を発見するまでに、あと数年はかかっていたのかもしれない。

だが、なぜフェイトは、こんな辺鄙な世界で、たった一人でその作業をしているのか。

もしプラセオの連中に勘づかれて襲撃されたときに自分以外の者が傷つかないようにするため。

彼女はそう言った。

だが実際のところは他人がいると足手まといになるからなのである。フェイト自身はそう考えてはいないかもしれないが、これは紛れもない事実である。

彼女はJS事件の首謀者、ジェイル・スカルエッティーのアジトに単身で乗り込み、スカリエッティーらを逮捕した。

並みの魔導師はもちろん、執務官であったとしても簡単に為せることではない。

彼女の場合、一人の方が敵に発見される可能性は低く、戦闘になっても他を気にせず思う存分戦うことができる。

要は彼女が優秀すぎるので、むしろ一人でいる方が遥かに安全で確実に任務を遂行できるのだ。

フェイトはまず、基地の周辺の地形を確認した。

手元にある地形図は急ピッチで作成されたもので少しばかり不安があったのだが、幸い大きく修正する必要はなさそうだ。

あらかたのデータの収集を終えてからフェイトはサーチャーの設置作業を始めた。

サーチャーの設置と言っても、サーチャー本体はかなり小型のものであり、重さは3キログラムにも満たないだろう。

だがその小さい物体にはカメラやレーダー、また、それらのデータを送信する発信器が詰まっている。

フェイトはこのサーチャーを広大な砂漠の砂の中に埋めた。

もしサーチャーの存在を組織の人間が知ったとしても、誰も探そうとはしないだろう。

辺り一面砂漠の広がるこの世界、血眼になって探しても見つけないところなどできないのだから。

サーチャーの動作テストも終わり、フェイトは管理局本部に戻ろうとしていた。

ファミリーの連中に気づかれた様子もなく、無事に帰還できそうだ。

そう思った矢先、僅かな空気の震えを感じた。

フェイトは目を無意識の内に鋭くし、息を殺して辺りの気配を探る。だが、自分の周りには敵どころか遮蔽物すらなかった。

それでも、しばらく周りの様子をうかがっていたが、怪しいものは何もなかった。

気のせいかな…。

そう思ってシャーリーと連絡をとるために通信機の電源を入れようとしたそのとき、遠くの方から爆発音が聞こえてきた。

フェイトが音のした方向に振り向くと、ファミリーのアジトがあるはずのところから煙が立ち上っていた。

やっぱり気のせいなんかじゃない！

フェイトは即座に通信機の電源を入れ、シャーリーとの回線が繋がった瞬間、シャーリーの声が聞こえるよりも前に声を発した。

「シャーリー、今すぐサーチチャーのレーダーの解析を始めて。」

「は、はい。わかりました。」

フェイトの焦る声を聞いたシャーリーは状況がわからないまま指示通りにレーダーのデータを自分のモニタに表示させた。そして、それを見たシャーリーは目を見開いた。

「どうなっているんですか？」

「基地で爆発が起こった。しかもかなり大きい規模で。」

「ちょっと待ってください。かなり大きめの魔力反応が複数あります。推定魔力値：A A Aクラス！詳細データ送ります。」

まもなくフェイトの手元のモニタにもシャーリーが見ているのと同じものが映された。

これには周辺の魔力反応が点で表されている。

魔力の大きさは色で識別されており、紫、青、緑、黄、赤の順に魔力は強くなっていく。

地図の中心と、そこからある程度離れたところに橙色の点がある。

中心の点はフェイトの魔力反応である。

そしてもう一方の点はちょうどアジトがあるところに表示されている。

中心の点の橙は赤みがかっているが、もう一方は黄色に近い橙色だ。つまり、魔力値はフェイトの方が大きいということだ。

アジトのあたりには他にも黄色の点が数個、緑と青の点は無数にある。

だが、よく見ると例の橙の周りにある点の数が時間と共に驚くべき早さで減少していく。

先ほどの爆発、そしてこの魔力反応の減少。

フェイトもシャーリーも、ファミリーのアジトで起きていることを理解した。

誰かがプラセオファミリーに戦争を仕掛けているということ。

「内部分裂か外部からの介入か…。」

フェイトはそう呟きながらほんの少し考え込んだかと思うと、とてもないことを口にした。

「今からその戦闘区域に行って確かめる。」

シャーリーは予想だにしない一言にかなり焦った。

「一人で行くなんて、いくらフェイトさんでも無茶です！せめて増援が来るまで待ってください。」

「そんなことしたら手遅れになる。」

フェイトの口調は決して激しいものではなかったが、その声にはモニタ越しのシャーリーにも感じられるほどの力があつた。シャーリーはその声に勝つことができなかった。

「…わかりました。でも、増援が来るまでは、絶対に無理しないでくださいね。」

「うん、大丈夫。それに、なのはやヴィヴィオに心配かけるわけにはいいからね。」

フェイトの声は普段の優しさを取り戻していた。

フェイトの足下に金色の魔方陣が現れ、徐々に輝きを増していく。
やがてその輝きは絶頂に達した。

「フェイト・テストロッサ・ハラウン、行きます！」

そう叫んでまもなく、彼女は愛機バルデイツシュと共に光の速さで空へと昇り、戦場へ一直線に飛んでいった。

それはまるで、光り輝く流星のようであった。

第四話（後書き）

今までは前の話を投稿する時点で次の話が8割ほど仕上がっていたのですが、第三話を投稿したとき、第四話は3割ほどしか書いていなかった…。

そして現時点、第五話の進捗状況は0%

話が完結するまで何年かかるだろうか…。

おまけ その一

シグナム「おい、作者。我々は貴様と違って忙しいんだ。なんで我々がこんなところにいなければならないのだ。」

ヴィータ「そーだそーだ。」

作者「そんなこと言わずに…。」

なのは「おまけを書く時間があるなら早く本編を進めてよ。」

フェイト「まあ、みんな落ち着いて…。」

はやて「あんまり責めたら作者が自害してまうやろ。」

作者「いや、自害なんてしませんから。というより、そんなことする度胸ありませんし…。」

作者「それでは、第一回おまけ雑談会を始めます!」

はやて「雑談会って、何するん?」

作者「主に本編で語れなかった裏設定を公開したりとか、設定画を

公開したりするつもりです。」

フェイト「あれ？作者のブログに同じことが書かれていた気がするけど。」

作者「そうです。はじめはブログで設定公開とかをしようとしていたのですが、アクセス数が全然延びる気配がなかったので、ブログ自体を閉鎖しました…。」

ヴィータ「アクセス数、だいたいいくらだったんだ？」

作者「おそらく0です。」

はやて「え、ゼロ？」

作者「最初のころはブログのカウンターの数が20を越えていたのを見て喜んでいたのですが、たぶんそれは僕がアクセスした回数だったみたいなんです…。」

フェイト「自分しか読んでないブログって、切ないね…。」

なのは「ところで何でこのタイミングで雑談会開いたの？」

作者「時間稼ぎです。次の話が出来上がるまで、もうしばらく時間

がかかりそうなので…。」

はやて「…一応聞いとくけど、その次の話って、今何パーセントぐらい書けてるん？」

作者「…。」

ヴィータ「てめえ、まさか！」

作者「そんな、全然書けてないなんてこと、あるわけないじゃないですか。」

シグナム「目が完全に泳いでいるぞ。」

作者「…本当にいつも書くのが遅くてすみません。」

ヴィータ「愚図！のろま！」

なのは「こんなに時間かけてるのに、この程度の文章しか書けないなんて…。この、動く産業廃棄物が！」

はやて「こんなところ、ヴィヴィオには見せられへんなあ…。」

作者「いや、最近急に用事とかが増えてきて忙しくなってきたんですよ。」

フェイト「用事って、どんな？」

作者「まあ…そこは秘密です。」

ヴィータ「ふっ、お前が普段何してるのか、私が知らないとも思っているのか？」

はやて「なんや、ヴィータは知ってるんか？」

作者「絶対に言わないでください。」

なのは「そんな、『言わないで』とか言われたら、ますます聞きたくなっちゃうよ。」

はやて「ヴィータ、言ってみ。」

フェイト「作者は私が取り抑えておくから。」

作者「言っちゃダメ、絶対！」

ヴィータ「こいつ、小説も書かずに毎晩ゲームしたりアニメ観たりしてるんだぜ。」

シグナム「貴様、読者に喧嘩を売っているのか。ただでさえ読者が少ないというのに。」

作者「欲望には勝てません。」

なのは「あなた、もしかしてゲームとアニメしか友達いないの？」

作者「他にもいますよ…数人。」

はやて「なのはちゃん、なんか機嫌悪そうやなあ…。」

フェイト「ヴィヴィオとちよつと喧嘩したらしいよ。」

はやて「じゃあ今日はずっとこの調子やな…。」

作者「ではここからは本編解説&裏設定公開を始めましょう。始めに断っておきますが、この物語の主人公はチートキャラではありませんし、転生とかでもありません。」

はやて「主人公ってあの『少年』のことか？」

作者「はい、そうです。」

なのは「今までの話を見てたら、主人公って完全に転生チートキャラだね。」

はやて「第一話で『俺達がこっちに飛ばされてからもう一年か…。』
て言ってたし。」

シグナム「素手で剣を折ったんだろ？」

ヴィータ「大人数の敵をたった一人で全滅させたんだろ？」

フェイト「全員全部、全滅だ!!」

な・は・ヴ・シ「えっ…?」

フワイト「そう言えば、まだ一回も主人公たちの名前が出てないけど…。」

作者「それはまだ秘密です。」

シグナム「…おい、貴様。もしや、まだ考えてないのではないのか?」

はやて「主人公の名前やろ?さすがにそれはないやろ…。」

フワイト「手、震えてるよ…。」

作者「すみません、まだ名前ついてません…。」

ヴィータ「お前、小説書くのやめてしまえ!」

なのは「ヴィータちゃん、これを小説って呼んじやったら全国の小説家の皆様に失礼だよ。」

作者「名前とか考えるの、苦手なんですよ。」

シグナム「そもそも貴様に得意なことなどあるのか?」

作者「…ありません、すみません…。」

作者「時代設定は新暦79年、V i V i dと同じ年です。」

はやて「それには何か意味あるんか？」

ヴィータ「どうせ適当だろ？」

作者「いや、時代設定だけはまともに考えました。」

フェイト「時代設定だけって…。」

作者「機動六課が解散した直後はティアナがフェイトさんの補佐官をやっているのであまりよろしくないですし、F o r c e時代は物凄く物騒な世の中になってるので、主人公をチートキャラにしないで一瞬で死にそうですし…。」

シグナム「…。」

フェイト「シグナムがとても悲しそうな顔してる…。」

ヴィータ「おい、作者！シグナムがいるのにF o r c eの話題すんな！」

シグナム「どうせ私なんて…。」

はやて「シグナム、そんな自分を責めたらあかんよ。第一、シグナムは新型デバイス使ってないねんから勝てんかったとしても仕方ない。むしろあれだけ張り合えたことを誇ってええぐらいや。」

シグナム「主はやて…。」

はやて「作者さん。」

作者「ど、どうしてそんなにニコニコしてるのですか？」

はやて「うちのシグナムを泣かせといて、タダで帰れると思ったらあかんで。」

作者「え、ちょっと待ってください。って、いつの間にバリアジャケットを…。」

ヴィータ「はやてが殺^やるなら私も。」

作者「お、落ち着いて…。」

なのは「ゴミは早く処分しなきゃね。」

作者「え……。フェイトさん、助けてください。」

フェイト「なのは、私はいつでもなのはの味方だよ。」

作者「そ、そんな…。」

シグナム「主の敵は我の敵！」

作者「いつの間に復活してるんですか、シグナムさん……。って、ほんと待って！ごめんなさい、ごめんなさい！！！」

なのは「デイバインバスター！」

フェイト「ハーケンセイバー！」

ヴィータ「ギガントシュラク！」

はやて「ラグナロク！」

シグナム「紫竜一閃！」

作者「ぎゃあゝゝゝ！」

なのは「あれ、死体がないよ。」

ヴィータ「逃げやがったな！」

シグナム「何としても探し出すんだ！」

下人さへしやの行方は誰も知らない…。

おまけ その一（後書き）

作者行方不明のため第五話の投稿遅れます。

はやて「おいっ！」

ヴィータ「作者、どんだけやる気ねえんだよ…。」

第五話（前書き）

お久しぶりです。

僕のこと覚えてますか？覚えてませんよね……。。

長い間放置していてすみませんでした。

これからもこんなペースになってしまおうと思いますが、気を長くしてお付き合いください。

第五話

長く延びた廊下の突き当たりにそびえ立つ扉。
その前に一人の少年が立っていた。

彼は腰に差していた刀をおもむろに鞘から抜き出し、大きく振りかぶった。

少年の足下に青く輝く魔法陣が現れ、銀白色だった刀も青い光に包まれる。

少年が刀を降り下ろす。

すると、風を切る音と共に斬撃が放たれた。

斬撃が扉を切り裂く。

切り裂かれた扉はそのまま音を立てて崩れ落ちた。

けたたましく警報ベルが鳴り響く。

だが少年は何事もなかったかのように瓦礫の上を歩き出す。

部屋の中にいた男たちは啞然とした。

爆音が響いたかと思うと、それまで扉として機能していたものが破壊され、そこから見ず知らずの少年が平然と姿を現したのだから。

「誰だ！」

男の一人が少年に向かって叫ぶ。

その声を聞いて正気を取り戻した他の男たちは各々の武器を少年に向かって構える。

「俺はアルスター・ノワール・オーウェンだ。あんたがプラセオのリーダーか？」

少年はある男を指差しながらそう言った。

「いかにも、私がプラセオの代表をしているハルティア・イリユージュだが、何か用かな？ 平和的な用事とは思えないが。」

彼は軽く笑いを浮かべながら、にもかかわらず覇気を漂わせながらアルスターと名乗った少年を威圧する。

「いや、それといった用事じゃないんだけど、あんたらの組織、取り壊させてくれないかな？」

アルスターも軽く笑みを浮かべながら、さらっと物騒な発言を繰り出す。

「いやだ、と言っても取り壊す気なんだろ？」

ハルティアは相変わらず微笑を浮かべながら少年を問う。

「どうしても取り壊しがいやなら殲滅に切り替えてもいいぜ。」

「おもしろいこと言うねえ。ところで君、どこの組織おやくしよに所属してるんだい？ 見たところ管理局の人ではなさそうだし…。」

「残念ながら無所属だ。友達もほとんどいないぜ。」

「一応聞いておくが、もしかして一人でここにきたのかい？」

「まさか、一人でこんなところに来られるわけないだろ。一人連れがいる。」

そう言いながらオーウェンは人差し指と中指を伸ばした右手を前に突き出す。

ハルティアはわずかに目を見開いた。

「二人だとしても普通こんなところへ来られないと思うのだが…。で、そのもう一人は今どこにいるのかな？」

「安心しろ、直にここへやってくる。」

「だけど、君の仲間と私たちの仲間、どちらが先に到着するだろうね。」

そう言いながらハルティアはデバイスを少年の方に構えた。と同時に、その足下にはミッド式の魔法陣が展開される。

それにつられて周りの男たちも、各々の武器を構えた。

部屋の内部にはおぞましいほどの魔力と殺気が充満している。

「最期に言い残すことはあるかな、オーウェン君？」

ハルティアはにやりとしながら少年に問う。

そろそろ味方がこの部屋に到着する頃合いだ。

結界を張っていた扉をいとも簡単に破壊したのには正直驚いたが、今この場にいる幹部たちだけでも十分対応できるだろう。

加勢が入ればすぐにでも決着がつく。

この場にいた全員がそう思っていた。
ただ一人、アルスター・ノワール・オーウェンを除いて。

「じゃあひとつだけ聞かせてくれ。」

そう言うアルスターは目の前にいくつかモニタを展開させた。

「お前の仲間って、こいつらのことか？」

そのモニタを見た瞬間、男たちは皆、動揺した。
ハルティアとて例外ではない。

モニタには基地内の廊下や倉庫に設置された監視カメラの映像が映
されている。

そして、そのモニタには意識を失い倒れている彼らの仲間の姿が映
っていた。

それも一人や二人ではない、10人は軽く超えているだろう。

ふとハルティアの脳裏にひとつの疑問が浮かんできた。

これだけ派手に暴れまわっていたのに、なぜ警報装置が作動してい
ない？

警報装置が故障していたとしても、誰かが騒ぎに気づいた時点で俺
のところにも連絡がくるはずだ。

いや、こいつが扉をぶっ壊したときはちゃんと作動していたじゃな
いか。

では何故…。

アルスターはその疑問に丁寧な答える。

「たしかに堅いセキュリティだったけど、一度ハッキングしてしまえば何も怖くない。むしろこっちとしては大助かりだ。どこに誰がいるのかが一目でわかるし、隔壁を降ろせば戦力を分断できる。警報装置が作動してなかったら誰も警戒なんてしないし、余程のヘマをしない限り侵入者がいるってことには気づかないだろ。もしお前らに感づかれたとしても、通信がこっちに筒抜けだからいくらでも対処できるしな。」

「やつを攻撃しろ！今すぐにだ！！」

ハルティアは気付いた。

自分たちがこの少年の掌の上で踊らされているということに。

そして、自分たちの仲間ではなく、彼の仲間がこの部屋に向かって来ているということに。

時間を稼いでいたのは自分ではなく奴だったということに…。

だが、ハルティア以外はまだ誰もそのことを理解できていない。

それでも、彼の切迫した声を聞いて一刻を争う事態であるということだけは理解し、戸惑いながらも攻撃姿勢に移る。

「もう遅い」

オーウエンがそう呟いた刹那、彼の真横を光の弾が通り過ぎた。そして光弾は、オーウエンに狙いを定めて今まさに銃の引き金を引

こうとしていた男にぶつかった。

男は光弾に突き飛ばされるように倒れ意識を失った。

全員の視線が弾の飛んできた来た方向に移る。

そこには瓦礫となった扉がある。

そして扉の向こう側からコツコツと足音を響かせながらアルスターと同じパイザーをつけている一人の少女が歩いてくる。

彼女の髪とバリアジャケットは黒で統一されており、特にその髪は吸い込まれてしまうような美しい漆黒をしている。

黒く輝き、重量感のある2つのバズーカ砲。

少女はそれらを左右の手で別々に持っている。

ハルティアは殺気を帯びた目付きで少女を睨む。

周りの男たちも状況を理解できたのか、少年と少女の一举一動を逃さないように、攻撃を始める予兆を察知できるように彼らを見つめている。

少女はアルスターの横で足を止めた。

「あいつがボスらしい。あっさり倒すんじゃないぞ。」

アルスターはハルティアを指差しながら少女にささやく。

「一応気を付けておく。」

少女も少年以外の者には聞こえないほどの小さな声で返事をする。

少女と少年の足元には色違いの魔法陣が描き出された。

少年は左手に刀を、右手にはハンドガンを握り、少女は両手にバズーカを構える。

男たちはそれを取り囲む。

そして、間合いをはかり照準を合わせ、いつでも攻撃できる体勢に移る。

「キャストは揃った。そろそろ開演といこうか！」

アルスターはそう叫びながら刀を振りかぶる。

それと同時に男たちはアルスター目掛けて砲撃を始める。

すると少女は、自分とアルスターを覆う球状のバリアを展開させた。そして弾丸をことごとく弾いていく。

「やつに攻撃する隙を与えるな！」

ハルティアは叫ぶ。

バリアでこちらの攻撃は全く届いていない。

だが、それと同時にアルスターもバリアが張られている限りこちらに攻撃できない。

ハルティアをはじめその場にいる全員がそう考えていた。

だが、またしてもアルスターの行動は彼らの想像をあっさりと裏切る。

アルスターの足下には青い魔法陣が展開され、刀も青い輝きを纏う。

その刀をアルスターは降り下ろし斬撃を放つ。

斬撃はバリアを内側から貫いた。

そしてそれは砲撃を弾きながら直進していく。

味方のバリアを破壊して敵に攻撃するという突拍子な戦術に、男らは驚きのあまり開いた口を閉じることが出来なかった。

斬撃の軌道上にいた者たちは回避しようとしたが間に合わず、まともに魔力ダメージを受け、気を失いバタバタと倒れていく。

この光景に目を奪われていた者も、ふと我に帰り、次の攻撃に備えアルスターのいた場所に視線を戻す。

しかしそこには少女の姿しかない。

アルスターはすでに刀を構えながら間合いを詰めて、男の懐に入り込んでいた。

男は銃口を彼に向けようとするがその前に刀が襲い掛かる。

その男が倒れると同時にアルスターは右手の銃の引き金を引く。

銃口から放たれた弾丸はまた別の男に当たる。

その男も気絶し倒れるが、アルスターは見向きもせず背後から降り下ろされる剣を左手の刀で受け止める。

その隙を突き、別の男はアルスターに斬りかかる。

だがその剣はアルスターに届かない。

少女のバズーカの弾が命中し剣は男の手から宙へと弾き飛ばされていた。

アルスターは自分に襲いかかろうとした男たちを刀で押しのけ、銃を撃つ。

発射された弾はバズーカを構えている少女の方へ飛んでいく。

弾は少女から僅かにそれてそのまま直進し、少女の後ろから斬りかかるうとしていた男に直撃する。

アルスターと少女は一人ずつの戦闘能力も高いのだが、息のぴったりあった連携により相乗的にその強さが増している。

プラセオの戦闘員は彼らに歯がたたず、ひとり、またひとりと倒れていき、数分後にはハルティア以外の者は全滅していた。

「殲滅終了まであとひとり。」

そういうながらアルスターはハルティアに狙いを定めて刀を振りかぶる。

そのときアルスターと少女の足下に突如魔法陣が浮かび上がり、そこから魔力の光を纏った無数の鎖が飛び出してきた。そして二人の身体に絡み付き、動きを完全に制する。

「油断したようだねえ。」

ハルティアが笑いながら語りかける。

「AMF効果付きのバインドチェーンか。」

アルスターは冷静に分析する。

少女はチェーンを引きちぎろうと体に力を入れたがびくともしなかった。

「無駄だよ。そのチェーンは、君たちが戦っている間私がずっと構築していたものだからそう容易く解くことはできない。」

「縛っているだけじゃ俺達は倒せないぜ。」

アルスターは追い詰められているにも関わらず相手を挑発するような言葉をいい放つ。

「言われずとも。」

そういうながらハルティアは自分の足元に新たな魔法陣を展開させ

右手を天に突き上げる。

するとその頭上に魔力の光の球体が現れた。

それは時間がたつにつれて次第に大きくなっていく。

「この技は長時間の溜めが必要で、尚且つチャージ中は移動できない。そのかわり威力はかなり大きい。時間という制約が無くなった今、君たちに勝ち目はなくなった。」

そうこうしている間に魔力の塊は直径がハルティアの身長と同じぐらいになるほどに膨らんでいた。

「そう勝手に決めつけられると困るんだけど。」

「この期に及んではったりかい？君たちには為す術などもない。」

ハルティアはふと思い返した。

目の前にいる少年の予想不能な数々の行動を。

何度追いつめられてもその度に隠し球を使って、逆にこちらを追いつめていた。

だが今度ばかりは勝手が違う。

隠し球を使ったのはこっちなだから。

ハルティアはそう自分に言い聞かせ、一切の不安をかき消す。

魔力球は膨張をやめ、そのかわりに輝きが増していく。

「これで終わりだ！」

ハルティアは叫びながら魔力球を二人の方へ放とうとした。

しかしその瞬間、彼の横にある壁から雷撃が飛んできた。正確にいうと壁からではなく壁の向こう側から放たれた雷撃が壁を貫通してハルティアを目掛けて飛んできた。

普段のハルティアならば避けるなりシールドを張るなりして、その雷撃から逃れていただろう。

だが、今の彼は魔力の塊を維持するのに精一杯であったのだ。

雷撃は進路を変えることなくそのままハルティアに直撃した。

しかし、流石はプラセオのトップに立つ男、ダメージをまともに受けても、意識を手放さず倒れもしなかった。

だが、彼は立っているのでやっとなかった。

そんな状態では彼の頭上にある膨大な魔力の塊を制御できない、ということとは想像に難くない。

魔力球はよろよろと重力の方向に落ちていく。

ハルティアは自分に迫り来る魔力爆弾を見つめることしかできなかった。

そしてハルティア・イリユージュは……自爆した。

第五話（後書き）

第6話は現時点で8割以上仕上がっているので投稿まで何カ月もかかる、という事態は避けられそうです。

あつ、ツイッター始めました。ぜひフォローしてください！
今現在、作者のツイッターは1人眩き状態になっております。
ぜひ、あなたの救いの手を……。

第六話

「武器を捨てて投降しなさい！」

その声と共に先ほど壁を粉碎した女が現れた。

「時空管理局執務官フェイト・テストロッサ・ハラオウンです。抵抗せず武器を捨てて投降しなさい。」

黒っぽいバリアジャケットを身に纏い、手には黒光りする大きな鎌を持っている。

それらの黒は彼女の金色の髪の輝きをより一層引き立てていた。

鎖が消え、体の自由を取り戻していたアルスターは命令どおりに刀と銃を足下に放り投げて両手を挙げる。

隣にいた少女はアルスターがすなりと命令を受け入れたことに驚きを隠せないようだったが、彼女もまた渋々と両手のバズーカ砲を足下に置いて両手を挙げる。

「あなたたちはプラセオの構成員じゃないみたいだね。名前を訊かせてくれないかな？」

二人とも敵対するつもりがないと判断したフェイトは表情と口調を幾分和らげて尋ねた。

「アルスター・ノワール・オーウェン」

「ユリス・ノエル・オーウェン」

少年と少女は名乗る。

フェイトは辺りを見渡すと、大勢の男が気絶して倒れている。だがここにいるはずのひとり男の姿が見当たらない。

「ねえ、ハルティア・イリユーージュを見掛けなかったかな？」

アルスターとユリスは一瞬何を尋ねられたか理解できなかった。

見掛けなかったかと聞かれても、ついさっきあんたがハルティアをぶっ倒してたじゃないか。

あんたの後ろの瓦礫の下に埋もれてるじゃないか…。

アルスターは頭の中で状況を整理する。

そうすると、ひとつの推測が浮かび上がった。

フェイトはハルティアを狙っていたわけではない

アルスターは、彼女がハルティア目掛けてあの雷撃を放ったのだと思っていた。

ハルティアが完全に無防備になっているところへの不意打ち。

その絶妙なタイミングの攻撃にアルスターは感心していた。

だが、あれは偶然そういう結果になっただけではないのか？

壁を壊すために放った雷撃がたまたまハルティアに直撃したのではないか？

まさかそんなこと…。

しかし、アルスターはふと気がついた。

余程のスキルを持ち合わせていない限り、壁の向こう側にいて見えない敵を、正確に攻撃出来るわけがない、と。

先程の彼女の発言と照らし合わせて、彼の推測は確信となった。

もしAMFが効いている鎖で縛られていたあの状況で、攻撃がこっちに飛んできていたら避けることも防ぐことも出来なかっただろう。アルスターは起こり得たもうひとつのシナリオを思い浮かべてぞつとしたと同時に、ハルティアの不運に同情した。

アルスターとユリスは白い目でフェイトを見る。

だが彼らの目はバイザーで覆われていたので、当のフェイトはそんなことを知る由もなかった。

微妙な沈黙が続く。

さすがのフェイトも、原因はわからないが気まずい雰囲気の流れでいるということに気付いた。

だがその沈黙はそう長くは続かなかった。

フェイトは不意に背中から僅かな気配を感じた。

並の人間なら全く気づかないほどに僅かな気配。

だがフェイトは身の危険を覚え、本能的に体を翻す。

すると目の前に、自分を目掛けて魔力を帯びた剣をまさに今振り下ろそうとしているハルティアの姿があった。

シールドの展開は間に合わない

そう判断したフェイトはとっさに手に持っていたバルディッシュで剣を受け止めようとする。

剣が振り下ろされる。

その瞬間、フェイトの目の前に橙色のシールドが現れた。

剣はシールドに遮られてフェイトには届かない。

フェイトは即座に飛び退いてハルティアとの間合いを広げ、シールド越しにハルティアの姿をとらえる。

ハルティアは剣を振り下ろした体勢のまま目の前ということが信じられないという顔をしてフェイトの後方を見つめていた。

ハルティアの視線をたどるとその先には橙色に輝いているユリスがいた。

その足下にはシールドと同じ模様の魔法陣が展開されている。

そしてフェイトようやく状況を把握できた。

彼女が私を助けてくれたのか。

それと同時に二つの疑問が浮かんでくる。

なぜ助けてくれたのだろうか。

どうしてデバイスを地面に置いていたまま魔法を使えるのだろうか。

だがそんなことを考えている暇はなかった。

アルスターが全身に光を纏ったかと思うと突然フェイトの方へ真っ直ぐに走り出した。

だがその速さは人が普通に走って出せるものではなかった。

フェイトはとっさに真横に飛び移る。

それと同時にフェイトの後方でハルティアの剣を受け止めていたシールドが突然爆発を起こした。

しかし、その爆発の威力はそれほどでもなく、ハルティアはとっさにシールドを展開し身を守る。

アルスターはフェイトのことを気に留めることなく直進していた。そしてスピードが最高点に達したときアルスターは地面を強く蹴り体を宙に浮かせる。

空中で体をねじらせながら、それでもスピードを落とすことなく、爆発が起きて土煙のたっている方向、ハルティアのもとへと突っ込んでいく。

全身を覆っていた光がいつの間にか右足に集まっている。

体の軸が回転するのに伴ってその右足も速度を増していき、上体がちょうど360度回ったとき右足の踵がハルティアの張ったシールドに激突した。

だがシールドは一瞬で砕け、右足はそのままハルティアの腹部に直撃する。

アルスターの運動エネルギーと魔法エネルギーがハルティアに伝達し、その体は突き飛ばされ、彼の後方にあった壁にめり込んだ。

一部始終を見ていたフェイトは驚きを隠せなかった。

フェイトの陰に隠れながらハルティアに接近し、シールドの爆破でハルティアの気をそちらに向け、またその爆煙で彼の視界を奪う。そこへ完全に不意を突いた飛び後ろ回し蹴り。

その見事な戦術にフェイトは驚嘆した。

しかし、二人の攻撃はまだ続いている。

ユリスは地面に置いてあったアルスターの剣を手にとると、剣先を彼の方に向けてそれを槍投げの要領で投げる。

アルスターは飛んできた剣の柄を掴み取り、そのままそれを振りかぶった。

剣に光が集い、足下には魔法陣が描き出される。

アルスターの剣は宙を切り、斬撃はハルティアのところへと飛ぶ。

ハルティアは壁にめり込んでいたものの、まだ意識を失ってはいなかった。

だがこの一撃はハルティアの意識を飛ばし、壁は負荷に耐えきれずに崩れ落ちた。

そしてユリスはフェイトがよそ見をしている隙にバズーカ砲を拾い上げて引き金をひく。

フェイトはそれを察知しバリアを張りながらユリスの方へ振り返る。だが弾はそれがバズーカ砲から放たれたとは思えないほどゆっくりした速度でフェイトの遙か頭上に行く。

フェイトはこの弾がどういう効果をもたらすのかを知ろうとして注

視していた。

だがそれはユリスの思惑通りだった。

弾が突然閃光を放つ。

一瞬にしてフェイトの視界は完全に奪われた。

手で目を覆いうずくまる。

どれ程時間が経っただろうか、フェイトはなんとか目を開くことが出来るようになった。

だが、視力はまだ完全には回復しておらず視界はぼやけている。

フェイトはあたりを見渡す。

しかし、アルスターとユリスの姿を見つけることは出来なかった。

彼らのバイザーが目を保護していたので閃光弾の影響を受けることなくそのまま立ち去ったのだろう。

壁に三つの大きな穴が開いている。

扉があったと思われるところにある穴と、先程フェイトがこの部屋に突撃したときに作った穴、アルスターがハルティアへのとどめの一撃に放った斬撃で開いた穴だ。

彼らはどの穴から逃げたのか。

フェイトにはそれを知るための手掛かりはなかった。

「……イトさん、フェイトさん！大丈夫ですか！」

シャーリーの声が通信を通して聞こえてきた。

ノイズは激しいがそれで相手が何を言っているのかが分からなくな

るほどではない。

「私は大丈夫。それよりここからプラセオの構成員じゃない二人が逃走したみたいだから、探索かけて!」

「それが、ついさっきからレーダーに障害が発生していて…。」

あの閃光弾のせいか、とフェイトは呟く。

「わかった、出来る範囲で探索を続けて。私は一応このあたり一帯を探してみるから。」

「了解です。」

アルスターとユリスはすでにプラセオの基地のはずれにいた。

「ねえ、私たちがわざわざプラセオの本拠地まで足を運んだ目的、覚えてる?」

「それはプラセオがアレを所持してるって情報が入ったから…:あつ!しまった、完全に忘れてた!どこにあるか聞く前にハルティアをブッ飛ばしちまった…:いま戻っても管理局の執務官までいるじゃないか!」

それを聞いたユリスは呆れて溜め息をつく。

「そうだろうと思った。はい、これ。」

ユリスはアルスターにチェーンが付いた緋色に輝く宝石を差し出す。それを見たアルスターはひどく驚いた。

「え、どこにあったんだ、それ。」

「ハルティアの首にかけてあったわ。服の下に隠れていたから私も最初は気づかなかったけど、アルがあいつを蹴飛ばしたときにチラッと見えた。」

「ならその時に言えよ、俺が手加減してなかったらうっかり破壊しちゃうところだったじゃないか。」

「あのときは執務官もいたし下手に行動できないでしょ。私はてっきりアルも気付いてるんだと思ってたから。」

「…よし、帰るか!」

「…」

ユリスはまた深いため息をついた。

彼らの足元に魔法陣が描き出され、眩い光が二人を包む。彼らの体は徐々に透明度を増していき、完全に透明になるとともに魔法陣も消え失せる。

そして誰もいなくなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7375n/>

魔法少女リリカルなのは SCARLET MINDS

2011年10月7日20時43分発行